

大学生が捉える親子関係の個人内の変化

—Circle Drawing を用いた検討—

久保田桂子

（白百合女子大学 生涯発達研究教育センター）

【目的】

Pipp, Shaver, Jennings, Lamborn, & Fischer (1985) は、回想法を用いて青年期の親子関係の変化を捉えようとし、親子関係を二つの円で表現する Circle Drawing という手法を考案した。本研究では、この Circle Drawing を用いて、父親との関係・母親との関係の捉え方に対する性差について検討する。

【方法】

対象者 関東の大学に通う男子大学生 25 名（19-22 歳）、女子大学生 31 名（19-20 歳）。

課題内容 Pipp et al. (1985) にならい、5 つの年齢段階（1-5 歳、6-10 歳、11-15 歳、16-20 歳、現在）における親との関係を二つの円を用いて描いてもらった。さらに、本研究では「以下の枠の中に、前のページで回答した二つの円（お母様（お父様）との関係）について、ご説明下さい。」という指示のもと、二つの円について説明を求めた。

分析方法 子どもと親それぞれの「距離」について分析を行った。2 つの円の距離は、親の円の中心から子どもの円の中心までの距離を親の円で割り、算出した。

【結果】

親の性による違い 親の性によって、その関係の描き方に違いがみられるかを検討するために、「距離」について男女別に分散分析を行った。その結果、男子 ($F(2,40)=.88, ns$)・女子 ($F(2,63)=1.42, ns$) とともに親の性と年齢段階の間に交互作用はみられず、父親・母親の円と距離の変化パターンに違いはないことが示された。変化のパターンは、父親との関係、母親との関係ともに、11-15 歳に向かって二つの円の距離が長くなり、現在に向かって短くなる傾向にあった。男子は親の性による主効果は示されなかったが ($F(2,38)=1.44, ns$)、女子は親の性による主効果がみとめられた ($F(3, 85)=10.45, p<.001$)。女子においては、母親よりも父親の方が親と子の円の距離がひろい傾向にあったのである。

子どもの性による違い 子どもの性によって、親子関係の描き方に違いがみられるかを検討するために、「距離」について父親との関係、母親との関係ごとに分散分析を行った。その結果、父子関係 ($F(2,106)=.73, ns$)・母子関係 ($F(3, 141)=.98, ns$) とともに、子どもの性と年齢段階の間に交互作用はみられず、男子・女子ともに、父子関係、母子関係の変化パターンに違いがないことが示された。

【考察】

久保田 (2009) において二つの円の距離と親密性との間に負の相関が示されたことから、11-15 歳で示された距離のひろがりや親密性の減少と捉えることもできるであろう。また本研究で示された変化パターンは、親との対立的な葛藤は青年期初期に一時的に増加し、その後減少するという研究結果 (Van Doorn, Branje, & Meeus, 2011) と類似した傾向にあると考えられる。